語り継ぎ、踊り継がれる

三十三のものがたり

Nakae Iwato Kagura



神々のお話を知って、神楽を鑑賞すると、
その舞や音楽の意味が分かり、衣装や面の表情がより輝きを増します。

第一座 五方礼始（ごほうれいし）

東西南北と中央の神様に礼を尽くし、今から舞う神楽が無事に終わるようにと神々に願い奉る儀式です。

第二座 随神（ずいしん）

古事記、日本書紀に出てくる「国生み」の物語です。伊邪那岐尊（いざなぎのみこと）、伊邪那美尊（いざなみのみこと）の神が矛（ほこ）で海をかき廻し、その雫が滴り落ちて磤馭慮島（おのころしま）ができました。

第三座 平国（へいこく）

伊邪那岐尊（いざなぎのみこと）、伊邪那美尊（いざなみのみこと）の御子・火の神は、母親の伊邪那美尊を焼き殺しました。お怒りなった伊邪那岐尊が火の神を切り殺すと、飛び散った血から四人の神様が生まれました。

第四座 返矢（かえしや）

天照大神（あまてらすおおみかみ）は、中津国（人間が住む世界）が乱れているという報告を聞き、これを治めるために天若日子（あめのわかひこ）を派遣しました。

第五座 天皇遣（てんこうき）

三人の神様が、中津国を治める大国主命（おおくにぬしのみこと）に、これから天孫がおいでになるから国を譲れと談判する、国譲りの話です。

第六座 綱の母（つなのはは）

女神様が川のほとりで神衣を洗い晒（さら）していると、道化者の男神が現れ、真似をしたり、邪魔をしたりするので、大御神（おおみかみ）がお怒りになる場面です。

第七座 神逐（かみやらい）

天照大神の弟・素盞嗚命（すさのおのみこと）は大変な乱暴者で、あまりの激しさを見かねた八百萬（やおよろず）の神々は、素盞嗚命を取り押さえ、根の国に追い払う場面です。

第八座 舞入（まいいれ）

伊邪那岐尊（いざなぎのみこと）が天照大神、月読尊（つくよみのみこと）、素盞嗚命（すさのおのみこと）を無事にお産みになり、それぞれに役割を与えて、磤馭慮島（おのころしま）に隠れられたため、これを寿ぐ舞です。

第九座 貴見城（きけんじょう）

海彦山彦の物語で、火闌降命（ほのすそりのみこと）と彦火火出見命（ひこほほでみのみこと）の御兄弟が、釣竿と弓矢を交換し、お供の神々と宮城に遊びに行く場面です。

第十座 朝倉返（あさくらがえし）

伊邪那岐尊（いざなぎのみこと）が火の神を切り殺した時に、飛び散った血から生まれた岩裂（いわさく）、根裂（ねさく）の神は、中津国が無事に天孫に返ったことを祝って舞います。

第十一座 綱武（つなたけ）

素盞嗚命（すさのおのみこと）が姉神・天照大神の田畑を荒らしたり、機屋（はたや）から馬の皮を投げ落としたりします。そこでお側の神々が、織った布で素盞嗚命を取り押さえようとします。

第十二座 降臨（ごうりん）

皇孫である"ニニギノミコト"が、天照大神から三種の神器を授かり、猿田彦（さるたひこ）の先導のもと高千穂の峰に舞い降ります。

第十三座 地割（じわり）

天孫降臨の時、神々一行の行く手が八つの道に分かれており、天鈿女命（あめのうずめのみこと）がその別れ道に立っていた猿田彦に質問をする時の問答です。

第十四座 武者（むしゃ）

八百萬の神々が鹿狩りに使用する"天の鹿児弓（あめのかごゆみ）""天の羽渡矢（あめのはわや）"を持って、荒振る神々を斬り鎮めます。

第十五座 宮〆（みやじめ）

天児屋根命（あめのこやねのみこと）が、宮遷しが無事にすんだことを祝って、末永く平和が続きますようにと祈念して舞を捧げます。

第十六座 八雲払（やくもばらい）

有名な八岐大蛇（やまたのおろち）の物語で、素盞嗚命（すさのおのみこと）は出雲の国の簸川（ひのかわ）の上流で、八つの酒樽で八岐大蛇を眠らせ切り殺し、奇稲田姫（くしいなだひめ）を助けるというものです。

第十七座 魔払（まばらい）

邪（よこしま）な神々を払う舞いで、八百萬の神々が真弓と美剣を持って中津国（地上の世界）で暴れる邪神を切り鎮めるところです。

第十八座 神使（かみづかい）



天の岩戸に天照大神が籠られ、何かと外にお出ししようと、天鈿女命（あめのうずめのみこと）が踊られるための"かがり火"を焚く場面です。

第十九座 礼始（れいし）



天の岩戸の開戸の前に、木、火、金、水の四柱の神々が登場し、天照大神を再び礼を以って迎えようとする舞いです。

第二十座 柴曳（しばひき）

まさに神と人の運動会で、天児屋根命（あめのこやねのみこと）が天の香具山（あめ）の真坂樹（まさかき）（榊）を根こそぎにして、天の岩戸の前に奉じる形の舞いです。神と観衆がこれを引っ張り合います。

第二十一座 岩戸開（いわとびらき）

いよいよ天の岩戸が開きます。天鈿女命（あめのうずめのみこと）が足を踏みならし乳房をあらわにして踊ると、天照大神が何事かと岩を少し開けられ、その時、手力雄命（たぢからおのみこと）は一気に岩戸を開けて、お迎えします。

第二十二座 柴入（しばいれ）

八百萬の神々が岩戸開きを祝って、香具山の榊を手に持って喜び舞います。

第二十三座 天の〆（てんのしめ）

素盞嗚命（すさのおのみこと）が天照大神がいらっしゃる高天原（たかまがはら）へ行き、大御神より曲玉（まがたま）と三種の神器の鏡をもらって降りて来られる舞いです。

第二十四座 綱切（つなきり）

先の八雲払を形を変えてこの舞いは舞われます。五方の神々に祈り、真剣で綱を切り、厄災を除くものです。

第二十五座 誓約（うけい）

天照大神に対して、弟である素盞嗚命（すさのおのみこと）が自分には決して汚い心はないと誓い、曲玉と剣を用いて、それを証明する場面です。

第二十六座 公矢（こうや）

八百萬の神々が、天の岩戸が開いたのを祝って天安河原（あまのやすかはら）に集まり、扇子を持ってこの太平が末永く続くようにと舞う場面です。

第二十七座 荒神（こうじん）

天の岩戸を一気に開いた手力雄命（たぢからおのみこと）が天の岩戸の前で荒舞う場面です。

第二十八座 心化（しんか）

先の二十五座"誓約"の手続きです。天照大神と素盞嗚命の約束により、刀から三人の女神様、曲玉から五人の男の神様が生まれたことを意味する舞いです。

第二十九座 平鉾（ひらほこ）

八百萬の神々が天の岩戸の開戸を祝して舞う場面です。それぞれ手に持っている鉾は、それを銅で作って祭りの道具にしていたようです。



第三十座 五穀舞（ごこくまい）

中津国に保食神（うけもちのかみ）が穀物の種を持っていると聞き、大御神は弟の月読尊（つくよみのみこと）を派遣して田畑に種を蒔く様子を表しています。

第三十一座 太平楽（たいへいらく）

これは、天孫降臨が無事に終わり、神様たちが天下泰平をお祝いする場面です。

第三十二座 岩戸舞（いわとまい）

岩戸が開きが無事に終わったことを祝って、八百萬の神々が喜んで舞う場面です。

第三十三座 大神（だいじん）

いよいよ最後の舞いです。天の岩戸開きも天孫降臨も終わり、そして神楽も無事に終わったことを祝しての舞いです。